

「タイ・チュラロンコン大学サマースクール参加報告書」

京都大学文学部4年生 栗原翔吾

今回のタイ・チュラロンコン大学サマースクールは、私にとって初めての海外経験でした。そのため、出発する前は、「タイの人たちとうまくやっていけるかな」、「料理は口に合うのかな」、「危険な目にあったり、トラブルに巻き込まれたりしないかな」など様々な不安を抱えていましたが、そのすべては杞憂に終わりました。

まず、現地の方とのコミュニケーションは、想像していた以上にスムーズに進みました。チュラロンコン大学の日本語学科の学生さんは日本語がお上手で、何不自由なく意思疎通することができましたし、放課後や休日にはタイの観光スポットに連れて行ってもらえて、交流を深めることができました。プログラムの終盤には、タイ人の学生と日本人学生での合同発表がありましたが、タイ人の学生の日本語能力のみならず、情報収集能力や知識量にも助けられ、満足のいく発表をすることができました。その一方で、マーケットやショッピングモールでは日本語が通じませんでした。片言の英語や授業で教えてもらったばかりのタイ語を駆使することで、自分の意志を伝えることができました。英語を話している時と比べて、たどたどしくタイ語を話している時のほうが、現地の方が優しく微笑んでくれていたことが印象的でした。

また、タイの食文化と触れることで、今回の留学はより充実したものになりました。タイ料理は基本的に辛いものが多いですが、パッタイやカオソーイなど、辛い物が苦手な日本人の口に合う料理もあります。街中では屋台も多く軒を連ねているので、お手軽に様々なタイ料理と接することができました。また、食文化以外では、ワット・プラケオやワット・ポーなどの寺院を訪ねることでタイの宗教観や美術について学ぶことができ、日本文化を相対化できたという意味でも、非常に貴重な経験になりました。

そして、最も危惧していたタイの治安について。私たちが滞在していたのは、サイアムというタイの中心街でしたが、そこは私が想像していた以上に発展していて、治安もよい場所でした。サイアムには、高層ビルはもちろんのこと、きらびやかな巨大ショッピングモールがいくつも建っていて、その洗練された景色は、東南アジアというよりは日本のような先進国を彷彿とさせました。その一方で、裏道に一步足を踏み入れてみると、楽器を弾いてお金を稼いでいる人や、片足を失った状態で地面に這いつくばって物乞いをしている人の姿を何度も目にし、すさまじい経済格差があることが分かりました。

今回の2週間の留学は、日本の当たり前が通用せず、日本では見ることができない景色と接することができたという点で、非常に刺激的でした。そして、今回の留学を通して、「海外で働きたい」という漠然としたあこがれが、明確な目標となりました。私は来年から社会人になりますが、今回の貴重な経験を糧に、将来的には世界を舞台に活躍できるビジネスマンになりたいと思います。